








車窓展望

-  海岸平野と都城盆地の第四紀層
-  シラスの台地
-  宮崎平野の宮崎層群
-  加治木附近の第三紀層
-  鶴戸山塊の日南層群
-  尾鈴山の石英斑岩
-  沿線の基盤になっている時代未詳の中生層



日豊線（その2）

延岡 — 鹿児島

いよいよ伝説の国日向へ

工都延岡を発車して間もなく 車窓左手には日向灘の明るい水面が見えはじめ 行手には白茶けた岩肌の山とその麓まで続いた白砂青松が見えかくれる。このあたりから日豊線沿いの風物はようやくその趣をかえる。日豊線延岡以北に対して ここ延岡以南には「稗つき節」と「天孫降臨」の伝説などを生んだ一昔前の素戔嗚尊の神気が満ちあふれている。

延岡から15分でとどろ。ここで 白茶けた山肌の石

英斑岩でできた半島を横切る。この半島をとりまく暗礁に 麦バエ、松バエ、イクイバエなどと耳なれない名



細島付近で海に濡れた石英斑岩 (柱状節理がよく発達している)

がつけられているのも面白い。

門川の手まえでそのハエ(八重)の群を望み 五十鈴川を渡り やがて着く所は新しい日向市の中心地富高。

ここは 平家落人の部落と 日本最初のアーチダムで知られた椎葉郷の入口。 古い言い伝えの椎葉のあたりは地質的にも九州最古の歴史を秘め 一時はクレーンやエンジンの騒音が谷々にこだましていたが ダム完成とともに再びもとの静寂さを取りもどした。

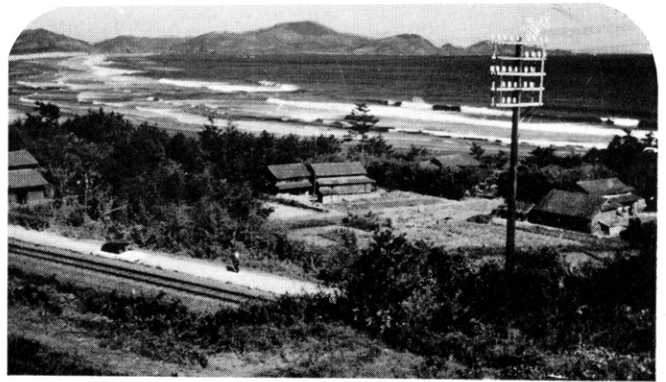
日向市の玄関口に当る細島港は 南の油津港とともに宮崎県の良港の1つで 豊富な電源と鉱産資源とを背後に控えて 将来の工業基地のホープと目される。

石英斑岩の山をかすめて神武の船出

富高を南すると いよいよ強烈な南国の光が車窓の眼を奪う。 まばゆいばかりの太陽と 底知れぬ紺青色の海と 真白にくだけるいそ波は 南の海ならではの風景を車窓一杯に投げかける。 碇石蛤を産する小倉浜の長汀や 岩脇の岩石海岸の油絵のような色彩は 日豊線沿線の車窓展望の白眉であろう。

細島港や岩脇港付近から美々津にかけて海にせまる山々は 尾鈴酸性岩といわれる石英斑岩でできていて 材木をたてて並べたような柱状節理が その昔 地表にあふれ出した岩漿の息吹きを物語っている。

このあたりから南の海岸一帯は 過去から現在にわたる長い年月の間に徐々に隆起した海蝕台で 温室村があ



碇石蛤で知られた小倉浜
(岩脇付近から細島半島をふりかえる)

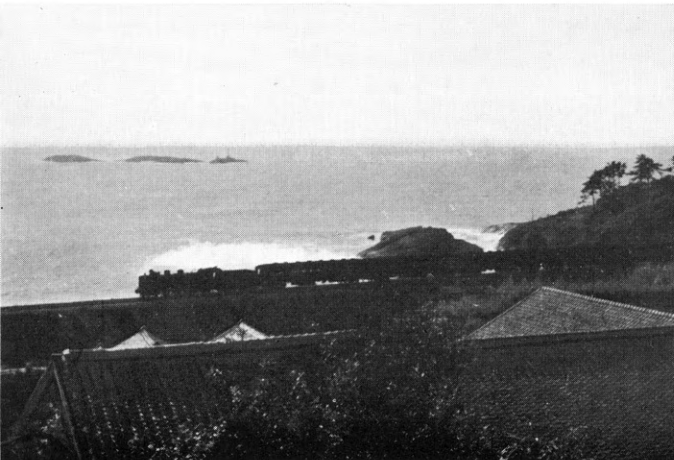
ちらこちらに見られる平たんな台地は 海岸段丘の立派な見本である。

岩脇から約10分 トンネルを出てほどなく ゆるやかなカーブを描きながら椎葉の里から流れ下った耳川の鉄橋を渡る。 いまでは淋しい漁港にすぎないが この河口こそ2,000年前の「神武天皇船出」の伝説で知られた かの美々津^{みみづ}の港にほかならない。 車窓からみられる美々津港外の暗礁 七ツバエ・黒バエを分かつ一の瀬が当時の船出の通路に当たったとも伝えられる。 しかし地盤の隆起は次第に海底を浅くし 2,000年後の今日では小舟が通過するにも容易でなくなっている。

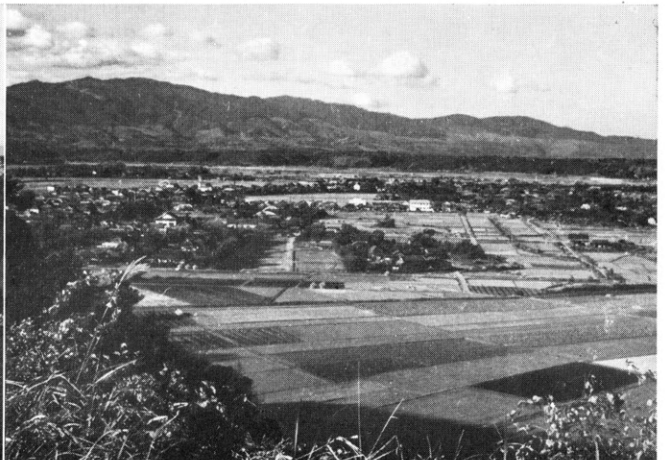
車窓にみる宮崎平野の地盤の変せん

美々津を離れると地形は一変し 屈曲の多かった山道から解放され 常春の宮崎平野が行く手にひろがる。

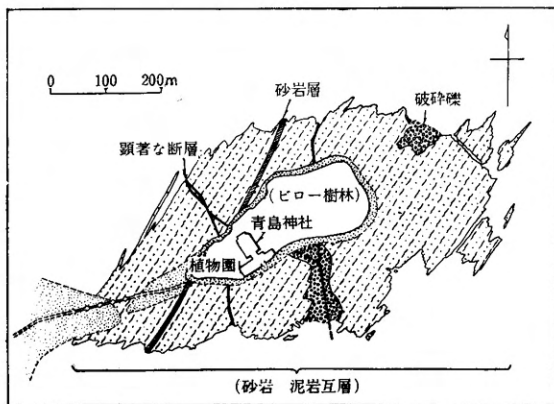
牧水の歌にもよまれた尾鈴(1,405m)の山塊は次第に遠のき 直線状の低い海岸の砂地に沿って 白波をほとんど目の高さを感じながら 列車は真直に南下する。



美々津付近に広がる日向灘
(沖合の岩礁は 神武天皇御東征船出の伝説を伝えている)



高鍋付近からみた小丸川の河岸の段丘と石英斑岩の尾鈴山塊



青島の地質

豊かな地味と 高い気温と清冽な水にめぐまれた平野のあちこちには 毎年のように襲ってくる台風にもめげず 満ち足りたような白壁の農家が点在している。

南九州の基盤をつくる古い砂岩・粘板岩の山々も はるか右手に遠のき 車窓ま近かには 砂や泥からできて いる新しい地層が丘陵をつくって これが宮崎市街地の さらに南方へと続いていく。

ここで少しこの日向の国 宮崎平野周辺の土地の歴史を紹介しておこう。

まず 古い地質時代の砂岩・粘板岩の山々が地変を受けて褶曲や断層ができ 次いでそれが海面上に現われる や長い地質時代に少しずつ洗い削られた。こうして第三紀の中頃に達すると その一角に尾鈴山の石英斑岩の山々が突如と現われ 東方の海底にはいま車窓に見るような砂や泥でできた新しい地層(宮崎層群)が徐々に堆積しはじめたのである。

その後このあたり一帯が再び陸化すると 現在の小丸

川・一つ瀬川・大淀川などがこれを侵蝕しはじめ この間にできた低地には沖積層が堆積しはじめる。現在みられるような波状地形はこうして 幾多の変せん・試練をへてつくり上げられたのである。

美々津から単調な海岸線と段丘との間を30分余り 高鍋付近から振りかえると 尾鈴の山塊は 西側に急 東側にゆるい一種の傾動地塊風の地形を呈しているのがわかる……やがてそれも段丘のかなたに消え去っていくのであるが……。

一つ瀬川を渡り なおも変らぬ景色の中を30~40分 右手の丘の上に八紘の基柱が見えると 間もなく宮崎駅。

異国的な風光を誇る日南海岸

大淀川にまたがる宮崎市は神武天皇をまつり 古代の遺跡に囲まれた人口10万余りの 古くからの観光都市である。しかしいまその周辺には天然ガスが探索されており 新しい工業都市の構想すら描かれている。

さてこの宮崎市では おそらく誰もが「青島」を思い出し 耳から 目から 日南海岸への しつようないざないをうけるであろう。

確かに 特別の急ぎの用でもない限り ここだけでしか見られないそのエキゾチックな風物を見のがすこともあるまい——仮りに譲ったとして最少限青島だけでも。

この海岸の後背山地は^{うど}尾鈴山塊とよばれ 第三紀の宮崎層群と それよりわずかながら古い歴史をもつ日南層群とが海に迫っている。そしてそれらの地層が日向灘



青島を取りまく波状の第三紀層



宮崎市西方に発達する大淀川沿いのシラス台地

の波に洗われ その露岩の縞模様は水成岩の構造をまことによく示している。

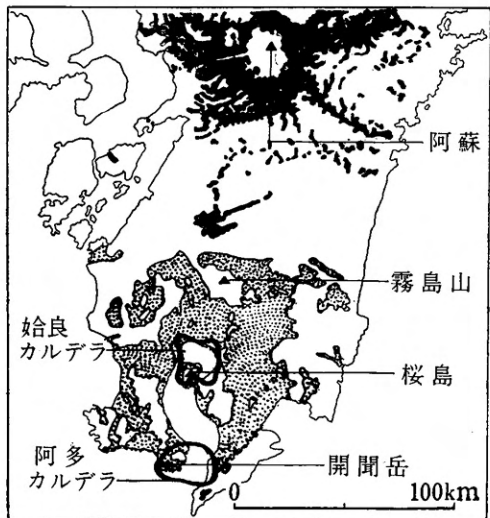
海幸彦・山幸彦の伝説を生んだ青島は 宮崎から前世紀の遺物のような電車で約30分 浜木綿の咲く海岸からも指呼の間に望める周囲約1kmの平たんな小島である。

島の中央は黒潮によって南から運ばれたビロー樹で被われ 外縁には緩傾斜の宮崎層群が露出し 干潮時にその波状の岩肌が全貌をあらわす。これは規則正しく互層する砂岩・頁岩の やわらかな部分が波にえぐられて 堅い部分が稜線をつくってでき上ったのであるが「鬼の洗濯岩」などという変わった名がつけられている。

こうして青島から南 海岸のバスウェイは 海蝕洞の中にまつられる鵜戸神宮・波静かな漁港油津・野生馬の遊ぶ都井岬・熱帯植物に囲まれた志布志の町など 延々60kmの日南海岸へ続いている。こうして遊子ひとたび日南海岸を訪えば フェニックスの葉を通してみえる南国の山々と 薫り高い南風にかもし出されるふぜいに「ハワイ何ものぞ」という土地っ子の自慢話もさこそと思われる。

霧島を望んで都城へ

再び日豊線の客となる。宮崎から鉄路は西に進路を変えて 山間に入る。川中が迫ると列車の走る台地には一面灰色の地層が発達し 河岸ではその切り立った崖が目をはきつける。シラスの世界に入ったのである。車窓から目をこらして見ると この崖の下には日



(松本唯一博士による)

阿蘇の灰石 始良・阿多のシラス・灰石

阿蘇の灰石とシラスの分布

南層群とよばれる ちょっと見では 青島の宮崎層群と見わけのつかないような砂岩・頁岩が現われているのに 気付かれよう。

田野から線路の勾配はにわかに急になり いくつかのトンネルを抜ける。青井岳トンネルをぬけ出ると 眼前には これまた神武の遺跡を伝える都城盆地がひろがる。

列車が大きくカーブを描くと 右手の車窓からは盆地がくまなく見わたされ 天候にさえめぐまればシラスをかぶったなだらかな山のかなたに「雲にそびゆる高千穂の峯」(1,574 m)が優美な山形をみせて現われる。

この高千穂峯から北西に連なる霧島山は 大小23個の

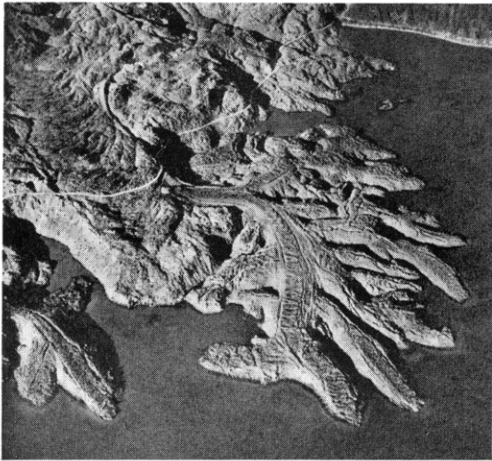
大 韓
浪 国
池 岳

新 中
燃 岳
岳 岳

高
千
穂
峯



霧島神宮駅付近から開析されつつある中生層とシラス台地をへだててそびえる霧島火山群の正面姿



大正3年の噴火で海中に流れ下った
熔岩流の末端 右上は大隅半島

アサヒ写真ブック「日本の火山」から

シラス地帯を縫うて

都城を西すればほどなく鹿児島県。汽車は砂利の多い台地をよこぎり 財部なからべをすぎて山地にかかると いよいよシラスの本場に入っていく。

この白いシラスなるものは これすべて火山の噴出物で その起源は霧島山から一時代前の すでに崩れ去った始良・阿多あいら あた火山に求めることができるという。

ところでこのシラスの正体がわかったのは割合に最近のことであるが その成因はなかなか面白い。

すなわち 多量の火山灰・軽石・水蒸気などが吐き出され1,000度に達する温度と雲のような身軽さをもって いわば熱雲となつてはい廻り 山を越え野を越えて地上のありとあらゆる物を焼きつくした。

そしてやがて地上に落着し そこで冷却固化して厚く堆積したのがシラスであると火山学者はいう。シラスは正式には熔結凝灰岩ようりつぎよこかいがんといっている。そしてその分布は九州の南部のみならず古い阿蘇火山によるものが北部にもひろがり 総容積は360km³にもなるという。

しかし 固まったこのシラスに覆われた所ほど厄介な土地も少ない。すなわち 乾燥するとコンクリートのように堅く 雨水を吸収すると今度は麦こがしのように崩れやすく したがって旱害にも水害にも大きな被害を生じやすい。

丁度大陸の黄土地帯のようにこのシラス地帯は 災害日本の一方の立役者なのである。

安山岩の熔岩でできた円錐火山と 10個の火口湖をようし 阿蘇・九重の雄大さに対して 対照的な優美さをほこっている。この山の活動の最後の記録は大正2年の高千穂西中腹の噴火で その後は桜島にバトンを渡してしまい 全く鳴りをひそめてしまっている。

山中の年間降雨量は3,000mmを越し 霧が多く 霧島の名はここからきたものともいわれるが 中腹帯には温泉も多く 南九州最大の温泉境ともなっており 別府とともに地熱の開発にも希望がもたれている。

やがて その名も古い都城。ここの盆地を北に流れる何本かの水流が 実は宮崎市内を流れ下る大淀川の上流であることはちよつとばかり意外であろう。



→
堀切峠付近から南方を望んだ日南海岸
宮崎層群の海蝕台が海に
せまっている

列車は北永野田付近で 西側の山に中生層が顔を出した峠を越して間もなく 霧島神宮駅。

霧島火山群と真正面から対立しているこの駅付近からは その最高峯・韓国岳(1,700m)の姿もみえる。

始良カルデラ——錦江湾の内懐に

ここで列車は進路を南に転ずる。水田に恵まれないこの地域には 牧園を中心に牧場がなだらかな勾配で続き その台地を新川がゆるやかに開析している。いくつかのトンネルを通り 川沿いの低地が巾を増すとやがてタバコで知られた国分の平野が足下にひらけ 錦江湾の異名を持つ鹿児島湾が明るい水面を車窓に写す。

対岸に桜島 そして見通しのきく口にはさらにそのわずか左手に 小さく開門岳の美しい円錐も望まれよう。

沖積平野に下り 中心地国分町をすぎ 新川を渡れば先住民 隼人族の名にちなむ隼人の駅。

ここから次の加治木にいたる間 短いトンネルがうがった地層は 肥料にまでされた介化石がざくざく出てくる第三紀層。このあたりから日豊線は桜島を目前にして 始良の巨大な噴火口——カルデラの内壁を走ることになる。その昔膨大量のシラスを吐き出した始良・阿多のカルデラの内部には すでに満々と海水がたたえられ 500mにもおよぶ玄武岩とシラスでできた急崖の麓には 美しい錦江湾の金波・銀波が打ち寄せている。

大崎の鼻をめぐり 龍ヶ水に近づけば すでに桜島は指呼の間に望まれる。

地質時代	岩石および地層	主な展望地
第四紀	桜島火山	鹿児島付近
	霧島火山	霧島神宮駅付近
	阿蘇灰石	白杵付近
	シラス	都城・国分間
	両子山火山	和気付近
第三紀	八面山火山	中津付近
	宮崎層群	高鍋・宮崎間
中生代	尾鈴山石英斑岩	岩脇・美々津間
	日南層群	青井岳トンネル付近
	大野川層群	白杵付近
	硯石統	下関・門司間
古生代	時代未詳中生層	佐伯・延岡間
	三波川結晶片岩	佐賀関半島
古末	古生層	白杵・佐伯間

ターミナルに活火山桜島

桜島は和銅年間からこの方30数回の噴火を数えることができる。大正3年1月12日の大噴火の記録はいまだに生々しいおもかげを残している。安山岩質の熔岩でできていた山頂部には似かよった高さの北岳(1,118m)・中岳・南岳の円錐が並び 現に噴煙を上げているのはそのうち南岳である。

手前の黒々とした部分は 大正3年の噴火による熔岩流で その後も今にいたるまで絶え間なく爆発を繰り返している。

列車はなおもシラスの崖下をひたはしり あたかも活火山桜島に吸い込まれるかのように 静かに鹿児島駅にすべり込む。(地質部)



↑
みごとなコニーデ式火山の開聞岳(924m) この付近に陥没カルデラの池田湖がある